

CONTENTS:

- P1 学長挨拶「将来に花開く教育効果の種！」
教務部長挨拶「改めてFD活動」
- P2 教職員研修・学生ワークショップ開催、寄稿(1)・寄稿(2)
- P3 FD・SD フォーラム開催、寄稿(3)、教員研修会実施
- P4 寄稿(4)、2016年度前期授業アンケート結果報告



将来に花開く 教育効果の種！

学長 西村 泰志

この4月以来、いくつかの支部あるいは職場の校友会総会・懇親会に出席する機会を得ました。それらに出席して痛感するのは、それぞれの地域あるいは職場で多くのOB・OGが主導的な立場で活躍しておられることです。以前、工大の教育は非常に厳しく、「工大は5年制の大学である」と言われていました。OB・OGの卒業後の努力もさることながら、若い学生時代に受けた教育が彼らの人生に陰ながら大きく影響していることは間違いありません。20年あるいは30年前の教育の成果が今花咲いているものと思います。現在、工大を職場として、若い学生を教育する立場にある者として、彼らの20年あるいは30年後の将来に、花咲かせるための「種」をしっかりと植え付けることが我々教職員ならびに事務職員全員の責務と考えます。

今年度、文科省のAP事業「テーマV 卒業時の質保証の取組の強化」が採択になりました。今まで、主に工学部で実施されてきた教育改革を全学に波及させる絶好の機会と考えます。AP事業で本学が狙っていることは、「入学時から、学生にしっかりと勉強させ、卒業時

の質保証を確保する」というものであり、教育機関として当然のことを実施しようとしているにすぎません。

それでは、そのことをどのように実現させるのか？ その手法として、各科目に対する「適正な評価基準に基づく厳正な成績評価」の導入であり、評価基準として「ミニマム・リクワイアメント」を提示するものです。この考えの導入によって、入学から卒業までに、ディプロマ・ポリシーに示された能力が身に着く過程を、「ディプロマ・サブリメント・IRシステム」を構築することによって可視化できるツールを作製し、修学支援体制を強化しようとするものであります。これらのことを実施するためには、それらに付随する様々な困難な課題を克服する必要があります。

しかしながら、これらの試みを通して、20年あるいは30年後に教育効果が花開く種を植え付けることができれば、学生にとってのみならず、我々教職員にとっても明るい将来を見つけられるに違いありません。



改めてFD活動

教務部長 野村 良紀

今でも大学における講義では、学期末に筆記試験を行い評価する場面が多いように思います。このような形態の講義では、次のような学生の行動特性を授業担当者として気に留めておくべきといわれています。

つまり、一連の講義の流れの中で授業担当者がある部分の内容を強調すればするほど、学生はその部分が重要だと感じ暗記して対処しようとするものです。逆に、老練な担当者は、この行動特性をおおいに利用している面を否定することはできません。

まさに暗記という行為は、知識を獲得していくうえで避けては通れないものです。しかし、学習者の活動がそこに止まっていたのでは知識の定着、さらにより高次の学修がおろそかになります。とはいつても、暗記した内容が将来ふっと蘇り役に立つことがないとは断言できませんが、知識の定着を図るためには、はなはだ効率が良いと言わざるを得ません。

できうる限り目の前の学生たちに多くを学んで欲しいと願う教員にとって、このような事態を避けるためには、何らかの工夫をする必要が生じます。例えば、同じ内容について繰り返しの学習を仕向けるとか、現実に沿った課題への取り組み、すぐに知識の応用にまで高めることを図る等が一般的といえます。いずれにしても手間がかかることは言うまでもありません。最近では、主体的な学びという面からアクティブラーニング(AL)の導入が広がっていますが、すべてをALで進めると知識量が減ってしまうことになりそうです。

文字通りFD活動の意義は、教員個々が蓄積しているこのあたりのノウハウや知見を学科単位あるいは学部単位、さらには全学で共有していくことにあります。したがって、どんな小さな発見であってもだんだん大きな灯に育てていくことはあっても、消してしまうことはありません。目指すものはなかなか手強い課題ですが、FDを通じ、ステークホルダー全体の満足が高まるよう進めていきたいと思っております。

教職員研修・学生ワークショップを開催しました

2016年度教職員研修ワークショップ 9月6日・7日開催
2016年度学生ワークショップ 9月6日開催

■テーマ 「一年次教育の問題点」

■場所 1401・1402教室他（枚方キャンパス）

教員と職員の絆を深めて大学の組織力を向上させるとともに、各学部・学科・部署で、今後のFD・SD活動を牽引する役目を担う人材の育成を目的として、「教職員研修ワークショップ(WS)」を開催しました。工大としては第5回目の開催となりますが、今年は学生の意見を取り入れるために、初の試みとして「学生ワークショップ」も合同で実施しました。また、今回も摂南大学から薬学部 安原智久准教授をアドバイザーとしてお迎えし、ご協力いただきました。

今回のWSの討論の主題は「初年次教育」にフォーカスし、「一年次教育の問題点」をテーマとして、総勢31名の教職員と学生(教員15名、職員6名、学生10名)が参加。ファシリテーターは、過去に参加実績のある教職員12名と摂南大学の学生2名が担当しました。

参加者はテーマごとのセッションを経て、さらに小グループに分かれて討議、プロダクト制作に取り組みました。小グループでのワークでは、ファシリテーターの皆さんの熱意ある導きや助言を受けながら、各参加者が活発な議論を交わしていました。日頃、接する機会のない教職員・学生同士がWSを通して交流を深め、素晴らしい研修会となりました。



教職員グループワーク（プロダクト制作）



学生グループワーク（プロダクト制作）



今年の参加メンバー（最前列は学生参加者）

寄稿(1)「教職員研修ワークショップに参加して」



情報科学部情報システム学科
講師

横山 恵理

このたび、教職員研修ワークショップを通し、「一年次教育」について考える機会をいただきました。一年次教育は学士力の養成において重要な役割を果たしています。私自身、情報科学部開講科目「基礎セミナー」担当者として、その重要性を強く感じているところでした。入社して半年という早い時期に、本学の目指す教育について考える機会をいただけたことを大変ありがたく思っております。本ワークショップで特に有益だと感じた点を、以下3点にまとめ、述べさせていただきます。

1点目が、教職協働で共通の理念、将来像を描くことができた点です。正課科目を担当する教員だけでなく、学生支援を担当し、推進する重要な担い手として大学職員を含めた教職協働で対応しようとする強い気運を感じ、このような充実した環境での教育に貢献できることを嬉しく思いました。

2点目が、教育実践につながる計画を立案できた点です。ワークショップでは一年次教育における基礎演習の授業設計について議論しました。ここでは、学習目標、評価、教育内容の3点の整合性を重視することが強く求められました。どの能力を高めるために、どのような構成にしたらよいか、学習技能中心型でよいか、生活面の支援内容をどこまで組み込めるのかといった種々の条件を重ねつつ、一年次前期15回に相当する内容・シラバスとその評価方法について検討しました。授業設計を通じて、一年次段階での学びに関する意見の多様性を認識する機会にもなりました。

3点目が、本学オリジナルの学びの共同体について考察できたことです。グループ活動を通して、学士力は本来大学のみで完成されるものではなく、社会に出た後も磨き続けるべき内容であることを確認したうえで、本学の目指す教育目標によって学士力の内容を解釈し、その目標を達成するためのプログラムが整合的かどうかを熟考しました。また、一年次における教育内容の拡張の方向性や、ほかの学習への応用の可能性を検討する機会となりました。

最後になりましたが、ファシリテーター、アドバイザーの先生方の、学びの場づくりや、細やかなお心遣いにも感謝申し上げます。参加者自身が気づきを生むために、見えないところで仕掛けを用意する工夫を凝らしてくださいました。今後、研修で学んだ内容を深め、より効果的な一年次教育の実践に貢献したいと考えています。

寄稿(2)「教職員研修ワークショップに参加して」



入試部入試課
菊池 優

学生時代、大学職員としての就職をめざすことを指導教員に相談した際に言われました。「事務職員といっても教育の一翼を担う存在。ペーパーワークにとらわれるのではなく、自らも『教育者である』という自覚を持つことが大切」

非常に感銘を受け、この言葉を胸に採用試験に臨んでいたことを覚えています。翻って現在、日頃の入試部の業務では、実際に先生方がどのような授業を実施し、学生がどのような能力を身に付けているのか、といったことがなかなか見えてきません。これではいけないと思いつつも、具体的な対策をとれていませんでしたので、今回の教職員研修ワークショップは非常にいい機会となりました。

ワークショップでは、教育の定義やカリキュラム立案、教育効果の評価まで、さまざまなテーマでディスカッションを重ねました。その

中で印象的だったのは、同じグループとなった教職員の方々の教育にかける熱い思いです。研修は2日間にわたり、参加する前は率直にいうと「長いな」と感じていました。しかし実際に始めてみると、「時間が全然足りない」と思うほど、アイデアや意見が百出しました。常日頃から抱えていた「もっと授業を改善したい」「教育の質をあげたい」という思いが噴出したのだと思います。その圧倒的な熱意をまとめあげ、プロダクトに落とし込み、発表まで持っていくという作業はとて大変です。しかしその過程で互いの意見をより深く理解しあうことができ、最後は「もう1日あってもいいな」と思うほどワークショップを楽しんでいました。話が少しそれますが、今年の6月に発行された「日経キャリアマガジン 価値ある大学」という雑誌で、本学は「授業の質の改善に熱心に取り組んでいる大学」として関西の私立大学1位にランクインしています。そうした外部からの評価も、先生方、職員の方々の熱い思いが反映された結果なのだと深く得心しました。

今回のワークショップで取り戻した熱い気持ちを忘れず、「教育者」として何ができるのかを常に考えながら今後も業務に励みたいと思います。最後になりますが、多大な労力と時間を準備に費やし、懇切丁寧にワークショップを運営していただいたスタッフの皆様にお礼を申し上げます。ありがとうございました。

全学FD・SDフォーラムを開催しました

2016年度第1回（通算22回）FD・SDフォーラム 6月6日開催

- テーマ 「工学部開講のOITリソース（PBL実践科目）の取組みについて—2014年度工学部教育改編の実施報告—」
- 主な講師 大山 理氏（本学都市デザイン工学科 教授）、河野 良坪氏（本学建築学科 准教授）、木村 元彦氏（本学空間デザイン学科 准教授）
伊與田 宗慶氏（本学機械工学科 講師）、古崎 康哲氏（本学環境工学科 准教授）、藤元 章氏（本学一般教育科 准教授）
- 場 所 121教室（大宮キャンパス）、1305教室（枚方キャンパス）

今回は「工学部開講のOITリソース（PBL実践科目）の取組みについて—2014年度工学部教育改編の実施報告—」というテーマで、多くの先生方にご講演いただき、160余名の教職員が参加しました。

工学部では、本学の教育理念「現場で活躍できる専門職業人の育成」を実現する教育体制の強化を目的として、「PBL科目を基軸とした体系的な教育課程の構築」を図る大規模な教育改革を実施しており、その特徴として、1年次全学生を履修対象とするPBL科目を開設するとともに、2年次についても自然科学系PBL科目を新たに開設しています。

2014年度の教育改革スタートから3年目を迎え、現行の教育課程について認識を深め、かつ今後の教育充実を促進する契機とするために、実施状況や課題についてご報告いただきました。

今後もFD・SDフォーラムでは学部・学科・授業単位の取組みをご報告いただく機会を設け、情報共有の機会となればとFD委員会では考えております。



寄稿 (3) 「FD・SDフォーラムに参加して」



工学部機械工学科
准教授
吉田 準史

今回、PBLに関するFD・SDフォーラムに参加しました。私が所属する機械工学科においても、低年次を対象としたPBL教育として2014年度よりエンジニアリング探求演習という科目名で電気電子システム工学科、電子情報通信工学科、ロボット工学科と合同でPBL教育を進めています。私自身、これらのPBL科目の担当であったことから、今回、他学科においてどのようにPBL教育を推進し、どのような課題を抱えているのか、ということを知ることができたため本フォーラムには高い関心を持って参加させて頂きました。

フォーラムを受講したところ、いずれの学科（分野）においても、まだ専門知識が十分でない低年次学生が興味をもって取り組めるようなテーマで工夫をこらして準備されていることに感心しました。また、PBL授業の課題として、「実施する課題のレベル設定」、「評価方法」、「学生のモチベーション」など概ね類似した項目が挙げられており、このような課題はPBLを実施する上で共通の課題であるということも認識できました。特に課題のレベル設定については、そのPBLを実施する目的とも直結することから、受講することで学生に「何を」学んで貰いたいのか、ということを知ることができると強く感じました。テーマの中には、殆どのチームが達成でき

るような難易度の低い課題を設定し、達成感を感じやすいものとする場合や、あえて達成困難な課題を設定し、技術、知識不足を体感させ、高年次で学ぶ座学の必要性を感じ、受講するモチベーションを向上させる目的のものなど多岐に渡っていました。評価方法についても、課題の難易度に応じ、結果そのものや製作過程に重点を置いた評価など、何に重点をおいて評価するのか、という評価の方法もPBL教育の目的と連動して設定する必要がある、ということもよくわかりました。

また、PBL授業の特徴として、複数教員や学科間で共同実施する科目であることから、前述した授業の目的、課題設定の意味、成績評価方法を十分に議論し共有することが学生の満足度や高い教育効果を挙げるためにも特に重要であると感じました。その一方で、PBL系の科目の教育効果をさらに高めるためには、PBLの授業内容だけを検討するのではなく、専門知識や技術を学ぶ座学系の科目との連携をさらに高めるための方法、システムを考案する必要があるとも思いました。連携を高めることで、PBL科目を通じて、座学系科目の重要性を知り、そして座学系科目を通じて、PBLで高い成果を生み出すという好循環が生じます。そのため、今後はPBL系の授業内容に加えて、他の座学系の授業との連携方法やこれらの授業数のバランスなど、広い視点で最適なカリキュラムを検討していく必要もあるのではないかと感じました。

いずれにせよ、今回のフォーラムおよびPBL科目の内容を吟味、検討すること自体が本学の授業、カリキュラムのあり方を検討する上で非常に良い機会になり、FD活動としても価値のあるものになると思われまので、今後も関連する担当者だけでなく学科全体、学部全体でPBL教育のあり方について検討を続けることが大事であると感じました。

教員研修会を実施しました

2016年度教員研修会 9月2日開催

- テーマ 「理系のためのアクティブラーニング」
- 講師 滋賀県立大学 理事兼副学長
倉茂 好匡氏
- 場 所 765教室（大宮キャンパス）

滋賀県立大学 理事兼副学長 倉茂 好匡先生を講師としてお迎えし、教務委員等の教員29名を対象に「授業の基本ワークショップ：理系のためのアクティブラーニング」を実施しました。

講師から、アクティブラーニング授業の基本（学生を授業に「参加」させるには）、理系授業でのアクティブラーニング法について講義があり、最後に「授業改善ワークショップ」として参加者個々の授業案を元に、どのようにアクティブラーニングを取り入れるかを実際に考えるグループワークを行いました。その成果はグループ別プレゼンテーションにより参加者全員で共有され、参加者にとって今後の授業改善に向けての大きな端緒となったようです。



寄稿（4）「教員研修会に参加して」



情報科学部情報メディア学科
准教授
鈴木 基之

「先生」と呼ばれる職業に就いて 20 年あまり。それなりに講義や演習等を担当してきましたが、教員免許（および、関連する講義の受講経験）も持っていない身としては、どのように教育を行っていくか、自分の経験だけが頼りの手探り状態でした。近年は「アクティブラーニング」とか「反転授業」とかのお話をよく聞きますが、自分の担当する講義と、どのように導入していけばよいか、今ひとつわからないままとなっていました。

特に疑問であったのが、いわゆる「アクティブラーニング」の導入方法です。当時の私の認識ではグループで何か課題を議論させ、その結果を発表させる、といったイメージだったのですが、社会学とか経済学とかならまだしも、理系の、しかも数学的な講義に導入するのは無理ではないか、と思っておりました。こうした講義では「議論する」というよりも「解を導く」事がメインですので、ただひとつの正解を

導く上で「議論」をする余地はありません。個別に問題を解かせることはできますが、「グループで議論」という形態はできないだろう、と思っていました。

しかし、それは浅はかな考えであったことが今回の研修でわかりました。こうした課題に対しては、

1. 個人で課題を解かせる
2. その結果をグループで共有し、解けなかった人は解けた人に質問して理解する
3. 個人ごとに知識が定着したかテストする

という方法で行えばよいのです。このやり方であれば、グループ学習の段階で解けた学生が解けなかった学生に教える、ということを行いますので、教わる側だけでなく、教える側にとってもよい学習になります。また最後に個人毎にテストを行いますから、解けなかった学生もグループ学習の段階で真面目に理解しようとする。このようにすれば理系科目にも導入できる事に、目から鱗が落ちる思いでした。

今回学んだ方法は、準備の時間の関係もあり、まだ自分の講義には取り入れておりませんが、「授業中に集中して聞かせる」ために、講義終了時に毎回簡単な小テストを導入してみる事にしました。まだ数回しか講義を行っていませんが、なんとなく学生が話を聞いてくれるようになったかと手応えを感じております。今後も少しずつではありますが、講義の実施方法を改良し、知識をより定着させ学生も満足できるような講義を行っていければと思っております。

2016年度前期に実施した授業アンケートの概要と集計結果を報告します

【実施科目数等】

*実施期間：第 14 回目または第 15 回目
(8 週で終了するクォーター科目は第 7 回目または第 8 回目)

区分	対象科目	科目数	履修者数	回答者数	回答率 (%)
学部	前期前半クォーター科目	12	385	259	67.3
	前期科目	1,546	68,118	49,121	72.1
	前期後半クォーター科目	7	324	219	67.6
大学院	前期前半クォーター科目	9	174	35	20.1
	前期科目	120	1506	865	57.4
	前期後半クォーター科目	4	76	24	31.6
合計	前期科目	1,666	69,624	49,986	71.8
	前期後半クォーター科目	11	400	243	60.8
	総計 前期全科目	1,698	70,583	50,523	71.6

【設問項目】

設問内容	選択肢
問1 この授業は、「授業のねらい、到達目標、進め方、使用する教科書・参考書、成績評価方法」について、授業初回に資料などを用いて説明が適切に行われましたか？	5: 適切であった 2: あまり適切でなかった 4: ほぼ適切であった 1: まったくなかった 3: どちらとも言えない
問2 この授業は、シラバス記載内容あるいは授業初回の説明に沿って進みましたか？	5: 進んだ 2: あまり進まなかった 4: ほぼ進んだ 1: まったく進まなかった 3: どちらとも言えない
問3 この授業は、学生の理解度を配慮しながら進められましたか？	5: 強くそう思う 2: あまりそう思わない 4: ややそう思う 1: まったくそう思わない 3: どちらとも言えない
問4 この授業は、教員の話し方は明確で、わかりやすかったですか？	5: 強くそう思う 2: あまりそう思わない 4: ややそう思う 1: まったくそう思わない 3: どちらとも言えない
問5 この授業は、黒板の使い方、文字の大きさ・見やすさ、映像資料の図や文字の見やすさ、は適切でしたか？	5: 適切であった 2: あまり適切ではなかった 4: ほぼ適切であった 1: まったく適切ではなかった 3: どちらとも言えない
問6 この授業の進行度は、内容を理解し到達目標を達成するのに適切でしたか？	5: 適切であった 2: あまり適切ではなかった 4: ほぼ適切であった 1: まったく適切ではなかった 3: どちらとも言えない
問7 あなたは現時点で、この授業の到達目標をどの程度達成できたと思いますか？	5: 100%~90% 2: 70%未満~80% 4: 90%未満~80% 1: 60%未満 3: 80%未満~70%
問8 この授業1回あたり平均して、予習・復習・レポート作成・課題作成(準備)に何時間かけましたか？	5: 3時間以上 2: 30分~1時間 4: 2時間台 1: 30分未満 3: 1時間台
問9 総合的に考えて、この授業を受講してよかったですか？	5: 強くそう思う 2: あまりそう思わない 4: ややそう思う 1: まったくそう思わない 3: どちらとも言えない
問10 この授業を良くするための意見、改善して欲しい事項があれば入力してください。	自由記述

【集計結果】 *大学院を除く

学部	学科等	科目数	問1	問2	問3	問4	問5	問6	問7	問8	問9
工学部	都市デザイン工学科	38	4.07	4.14	3.86	3.87	3.85	3.93	3.19	3.14	3.90
	空間デザイン学科	35	4.26	4.24	4.04	4.09	4.10	4.10	3.32	2.78	4.20
	建築学科	45	4.34	4.32	4.09	4.17	4.14	4.15	3.36	2.93	4.30
	機械工学科	86	4.28	4.29	4.01	4.07	4.11	4.09	3.29	2.84	4.11
	ロボット工学科	3	4.06	4.18	3.34	3.75	3.23	3.37	2.90	2.29	3.91
	電気電子システム工学科	74	4.32	4.38	4.05	4.18	4.20	4.12	3.25	2.63	4.18
	電子情報通信工学科	3	4.20	4.08	3.78	4.05	4.20	3.91	2.80	2.58	4.05
	電子情報通信工学科	37	4.27	4.31	3.94	4.03	4.05	4.03	2.97	2.58	4.10
	応用化学科	3	4.27	4.18	4.36	4.18	4.09	4.00	3.36	2.53	4.27
	環境工学科	93	4.19	4.22	3.88	3.89	3.95	3.91	3.01	2.83	3.97
	生命工学科	39	4.37	4.40	3.99	4.04	4.14	4.12	3.00	2.97	4.16
	生体医工学科	52	4.23	4.25	3.99	4.04	4.05	4.05	3.23	2.70	4.09
	共通科目	52	4.29	4.28	4.02	4.07	4.08	4.06	3.39	2.77	4.08
	その他連携科目	5	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
	キャリア形成の基礎	95	4.45	4.46	4.31	4.38	4.32	4.32	3.24	2.35	4.24
	工学の基礎	17	4.08	4.18	3.85	3.97	3.90	3.94	3.36	1.65	3.73
	情報科学部	198	4.33	4.40	4.11	4.17	4.19	4.17	3.45	2.14	4.08
情報システム学科	181	4.25	4.33	3.95	3.98	4.07	4.04	3.40	2.37	3.99	
情報メディア学科	24	4.36	4.33	4.21	4.24	4.20	4.22	3.29	2.42	4.21	
情報ネットワーク学科	36	4.21	4.25	3.85	3.93	4.02	3.96	3.01	2.62	3.95	
共通科目	38	4.23	4.27	3.90	3.96	4.03	4.02	3.07	2.67	4.04	
知的財産学部	34	4.16	4.19	3.80	3.89	3.97	3.92	3.05	2.85	3.95	
基礎教育科目	36	4.14	4.22	3.80	3.83	3.99	3.89	2.87	2.67	3.89	
専門科目	154	4.17	4.17	3.97	3.99	3.99	4.00	3.03	2.23	3.93	
基礎教育科目	3	4.75	4.50	4.75	4.50	4.75	4.25	3.00	3.50	4.50	
基礎教育科目	34	4.56	4.55	4.44	4.48	4.46	4.49	3.66	2.84	4.46	
基礎教育科目	3	4.47	4.47	4.40	4.33	4.40	4.40	3.33	3.13	4.07	
基礎教育科目	1	5.00	5.00	5.00	5.00	4.67	5.00	3.33	2.33	4.67	
基礎教育科目	36	4.50	4.42	4.33	4.38	4.35	4.35	3.42	2.56	4.29	
基礎教育科目	1	4.47	4.65	4.13	4.24	4.27	4.16	3.24	3.07	4.16	
基礎教育科目	2	4.67	4.48	4.52	4.56	4.19	4.41	3.56	2.78	4.48	
基礎教育科目	9	4.46	4.49	4.20	4.27	4.34	4.22	3.32	2.99	4.24	
基礎教育科目	38	4.28	4.26	4.03	4.07	4.11	4.10	3.26	2.62	4.01	
基礎教育科目	1	3.96	4.07	3.49	3.44	3.53	3.59	3.04	3.18	3.78	
基礎教育科目	24	4.41	4.41	4.28	4.32	4.33	4.30	3.58	3.01	4.22	
基礎教育科目	1	4.06	4.06	3.66	3.66	3.77	3.73	3.02	2.94	4.22	
基礎教育科目	10	4.27	4.28	4.04	4.09	4.06	4.10	3.20	2.70	4.04	
基礎教育科目	24	4.48	4.49	4.34	4.46	4.41	4.34	3.28	2.62	4.42	
基礎教育科目	12	4.14	4.25	3.65	3.77	3.69	3.69	3.05	2.78	3.94	
平均(合計)	1,546	4.26	4.29	3.99	4.04	4.08	4.06	3.23	2.53	4.04	
平均(合計)	7	4.14	4.10	3.76	3.85	3.97	3.84	2.97	2.82	3.88	
統計	1,565	4.25	4.29	3.99	4.04	4.07	4.06	3.23	2.53	4.04	

【お問合せ先】

大阪工業大学教務部教務課
TEL.06-6954-4083
FAX.06-6954-4049
OIT.FD@joshu.ac.jp

~FD NEWSを教職員の情報共有にお役立てください~

学部・学科・小グループ・個人での取り組みや活動をFD NEWSに投稿してください。
授業運営上の悩みを解決した方法などがあれば情報共有していきましょう。